

# 釧新郷土芸術賞に輝く

受賞者の  
横顔

□下□

## 陶房「尚藍」で

すこす毎日

安孫子さんが毎日こもる制作の場は、母の折固さんが命名した尚藍（しょうらん）陶房。棚にはまだ半乾

きの茶碗が並び、釉薬の塗布を待っている。ここで安孫子さんは毎日午前九時から夕方五時まで制作に打ちこむ。回転するろくろに土を乗せ両手でいとおしむように形を作っていく。魔法

をかけたように土は伸び上がり、茶碗が姿を現してくる。「土をこねて焼き上げて一つの形になるのはすごいこと」と安孫子さんは言う。

興味を持ち、武蔵野美術短大では陶磁コースで学び益子焼の長谷川陶苑氏について、技術を深めた。昭和五十四年に帰郷した翌年に窯を開き、五十五年に初めて個展開催となる。「ありきた

りの釉薬をどう生かし表現していくか。頭の中で思い描いても窯から出してみると、思ったような効果が出てない。始めて四、五年は精神的に落ち込む場面が多かった」と振り返る。「周囲の人が良いねと見てくれても、私にとつての会心の

露するという。現在、十人の婦人に毎週水曜日と夜、陶芸も指導しているというから、日常生活は大変だ。自宅の食器類はやはり自作が多いという。ひとかたまりの土を押しつけるようにこねる。自然、手は荒れて皮膚も薄くな

いるのかなあと考えこんで、土から解答が得られなしかと悩む。無心に作った子供の作品が、うらやましく見えてしまう。

色を焼き物に出せたらとあこがれる。雲に反射した紫めいた色にも引かれてしまおう」と言う。湿原の四季を眺めては作品のヒントを求めていく。公募展にも自作を出品して新たな飛躍を促してみたい。尚藍陶房ですこす一日の積み重ねは、作者に満足感を与えるためのものではないようだ。「皿を平にするのは難しいもの」と言いながら、しかし個展会場に並ぶ作品は美しく堅固な姿を見せる。新しい色を求めて試行錯誤の毎日が続く。

## “会心の作”求め熱中

### 湿原の持つ色と取り組む

作はまだないんです」とも

り、手首に負担がかかる。「だましまし続けたが、痛みがひどくて一年ほど整形外科に通ってやっと回復したことも。この時はダメかと思つて……」かと思えば力

だ。「湿原の広さを小さい壺に表現したい。湿原の夕焼けや朝焼けの色、ああいう

を求めて試行錯誤の毎日が続く。

### 自宅の食器は自らの作品

二十六歳で結婚し子供二人をもつけたが、友達を連れて来て「お母さんこんな

ツターで手を切つてしまひ、やむなくゴム手袋で土に挑んだり。「なぜ、やって

## 陶芸

安孫子 尚枝さん

(釧路市愛国東四の五の七)

思ったような効果が出なく、はじめたころは落ち込むこともあった…と安孫子さん

